

第198回森で遊ぶ会・実施報告書 (八島湿原)

1. 実施日時 2023年7月24日(月) 11:00 ~ 15:00(現地)
2. 実施場所 八島湿原(長野県・下諏訪町)
3. 参加インストラクター会員
担当: 小久保、小嶋
アシスト会員: 青野、大石、小長井、佐野、杉山、高橋、矢下
4. 一般会員の参加 合計28名(静岡市・20、藤枝市・7、島田市・1)
5. 募集方法 前回の参加者にチラシを手渡し、森で遊ぶ会・会員へのクチコミ、会員への募集メール
6. 実施状況

県内の森歩きにはやや行き尽くした感もあり、今回は少し遠出の観察会となった。もっともここ八島湿原(八島ヶ原湿原)には4年前にも来たが、「花の多いこの湿原をまた見てみたい」という声もあって今回の計画となった。梅雨明け後で雨の心配はなかったが、下界は猛暑の1日だった。ここ八島湿原でも木道の上では



陽を遮るものも少なく日射が暑かったが、木陰に入ると標高1600mの湿原を吹き渡る風は涼しく心地よかった。

この湿原は本当に草花が多く、今回も沢山の花に彩られた美しい光景を堪能できた。年々暑くなってきているせいだろうか、やや開花時期の遅いやなぎランなどももう花開いており、多くの花々が一齐に咲き揃ったような状態だった。この時期にここで特に人々の目を引くのは、紅色のアカバナシモツケソウやヤナギラン、白いハナチダケサシなどの群生だ。他にも黄色のニッコウキスゲやキンポウゲ類、淡紅色のハクサンフウロやアサマフウロ、白色のカラマツソウやシシウド類、それに青紫のノハナショウブなど、代表的なものだけでも数え上げたらキリがない。ここは貧栄養の高層湿原なので湿原そのものにはあまり花は見られないが、周囲を取り囲む木道沿いの草地には非常に花が多い。特に近年周囲を防鹿柵で囲ってからは、一気に花が増えた。

また草花だけでなく樹木も見ていただこうと、湿原周囲に多いズミ、マユミ、ミズナラ、ウツギ類などにも目を留め



ていただいた。しかしノリウツギ以外に開花した樹木はなくイマイチの印象は免れなかった。今回は他に野鳥と蝶にも目を向けていただいた。この湿原に多いノビタキとホオアカ、それにヒョウモンチョウを資料に載せ、皆さんに探してもらった。中には野鳥や昆虫に詳しい参加者もあり、双眼鏡片手に草原を覗き込む人の姿も多かった。いずれにしても花いっぱいの湿原で、青い空と白い雲、そして緑に覆われたなだらかな丘陵を眺めながら、特上の散策ができたのではないかと思う。以下、5つに分けた各班の様子を個別に紹介したい。

<1 班> (担当: 青野、大石)

ベテランも含む女性 5 人の班をガイドした。駐車場をトンネル歩道で抜けるとすぐに湿原入り口になる。この入り口の所で早速花の観察が始まってしまい、なかなか本来の木道にたどり着かない。そこへいきなり説明資料に載っていない植物がいくつも(ウバユリ、ニワトコ、マユミ、ミツモトソウ、その他)出てきて、ガイドも四苦八苦である。そんな事で思わぬ時間を使ってしまったが、やっと湿原を周回する木道へと歩を進めた。しかし木道に入ればお目当ての花が目白押しで、皆さん資料を見たり写真を撮ったりとなかなか前に進まない。反対側からは中学校か高校の団体が次々とやって来るので、平日にもかかわらず木道上は混雑して観察にも時間がかかった。そんな中でベテランの参加者は、資料にはないメタカラコウ、ツリガネニンジン、マツムシソウなども目ざとく見つけていた。花々の中では、アカバナシモツケソウやハナチダケサシの群落が特に目立ち、見事だった。ただ最初のうちは日射が強暑だったが、歩くほどに上空に雲が多くなってきた。雲で陽が遮られれば、湿原を渡るさわやかな風はすこぶる涼しく快適であった。

こうして観察に時間を喰ったため、昼食予定地の鎌ヶ池の広場に着いた時には予定の12時を50分も上回ってしまった。昼食後に広場を出発し後半の行程を歩くが、後半の方が距離が長いというのにあまり時間は残っていない。いきおい急ぎ足になったが、午後は雲が無くなり風も弱くなって暑さがきつかった。後半は班毎にまとまって歩くというより、やや入り乱れたり思い思いのペースで進む人も出てきて、全員に説明を聞いてもらう機会は少なかった。それでも湿原西側の木道では、白樺の「への字」の落枝痕を確認してもらったりした。西側の木道では草木名の看板が増えるので、その都度またしげしげと観察したり写真を撮ったりする人も出て、結局予定よりだいぶ遅れて駐車場に戻った。



(青野 記)

<2 班> (担当: 小久保、小長井)

藤枝からの参加者を中心に、ご夫婦と女性 4 人、計 6 人の班だった。大半の方はリピータだが、初参加の方も 1 人おられた。今回の観察の目玉は湿原の周りに咲く花で、期待通り沢山の花を見ることができた。確認できた主な花は: アカバナシモツケソウ、アサマフウロ、イブキトラノオ、ウツボグサ、オオカサモチ、オカトラノオ、オニシモツケ、オミナエシ、カラマツソウ、カワラマツバ、キバナノヤマオダマキ、キンバイソウ、クガイソウ、クサフジ、コウリンカ、コ

オニユリ、シシウド、チダケサシ、ツリガネニンジン、ナンテンハギ、ニッコウキスゲ(ゼンテイカ)、ノアザミ、ノコギリソウ、ノハナショウブ、バアソブ、ハクサンフウロ、ハナチダケサシ、ホソバノキリンソウ、マツムシソウ、ミズチドリ、ヤナギラン、ヨツバヒヨドリ、ワレモコウなどだ。

参加者の中には花や蝶に詳しい方もいて、他の人が見逃してしまうような花を見つけたり、周りを飛び交う蝶をじっくり観察したりしていた。他の参加者の「あの花は?」との問いに、「ナガボノワレモコウ」。黒褐色の羽の蝶についてはインストラクターの「ヒカゲチョウ?」に対して、「シジ



ミチョウの仲間でトラフシジミと思う」と回答、などだ。また野鳥の会の支部長でもある男性は、湿原の中に野鳥(ノビタキ、ホオジロ、ホオアカなど)をいち早く発見し、双眼鏡で観察していた。こんな状況もあり、昼食場所については予定時刻より1時間程度遅れてしまった。昼食後は遅れを挽回するため、急いで歩くことになった。

樹木の種類は少なかったが、ノリウツギ、ズミ、マユミ、ミズナラの個体数は多かった。ズミ(別名:コリンゴ)の仲間のエゾノコリンゴがあったため、異形葉の有無の違いなどを説明した。マユミについては、実がついているものは皆さんすぐにわかったようだが、実がなく葉だけだとわかりづらいようだった。そこでマユミのように樹皮にも特徴がある場合は、樹皮も判断材料になることを伝えた。他、ノイバラの特徴のある托葉(葉柄に合着しクシの歯状に切れ込む)を観察してもらったりした。

参加者の1人が、双眼鏡で針葉樹(トウヒ属のイラモミ?)のてっぺん付近に下向きに着く大きな球果を見つけた。野鳥を探していたのかもしれないが、普通は見逃してしまうような高い所だった。他に双眼鏡では、野鳥以外にも湿原の中にあるモウセンゴケやキリガミネアキノキリンソウの花を確認することができた。当班の参加者には双眼鏡を持参された方が多かったが、双眼鏡は役に立つことが改めて感じられた。花だけでなく、野鳥や蝶など観察対象が多く、全体的に時間が足りなかった。その点はちょっと残念だったが、たくさんの種を確認できたので、参加者には満足していただけたのではないだろうか。(小長井 記)



<3 班>(担当: 杉山、高橋)



参加者は、常連の3名と久しぶりの方3名の6名で、中に植物のベテラン2名がおられた。今回は、花をたくさん見て楽しんでもらうことを主眼としてご案内した。湿原を見渡せる場所に立った時の気持ち良さは、これから始まる観察会が楽しくなりそうだと予感させた。湿原に降り立つまでも、次から次へときれいな花が迎えてくれた。下見の時より花数は多い。チダケサシ、ハナチダケサシの華やかさ、シシウドの勇猛な姿、盛りは過ぎたがゼンテイカの澄んだ黄色は目を引く。これから咲かんとするウバユリも、しっかりとした蕾を準備していた。

みんなでカラマツソウを覗き込み、沢山の雄しべの中に埋もれる紅紫色の雌しべを探した。ハクサンフウロなどなぜハクサンを冠する植物が多いのか、その理由を話した。タカトウダイでは面白い形の子房をルーペで確認した。下見ではまだ咲いていなかったコバギボウシが濃紫色の縦筋を花冠に描き、さあ見てくださいと横を向いて開いていた。ツリガネニンジンやマツムシソウも咲き始めた。柔らかい薄紫が何とも優しく風に揺れている。

イブキボウフウのボウフウの意味と薬効を説明し、ホソバノキリンソウの肉質な葉に触れ、厚みを実感してもらっ

た。蕾のクモ毛や葉の基部の鉾型の張り出しが特徴のハバヤマボクチもよく観察してもらった。そこで葉裏の綿毛は蕎麦の繋ぎとして使われ、長野県では「ぼくち蕎麦」として食されていることを説明した。(ただ、実際にはオヤマボクチが良く使われるようだ。) 参加者の一人が「これは何?」とまだ固い蕾を数個付けた植物を指さした。「うーむ?」 同定に苦しんでいると「シラヤマギクじゃない?」とベテランの一言。葉を確認すると、確かにその特徴が見られた。流石である。キバナノヤマオダマキがうつむいて咲いている。どうして下を向くのかその理由や、派手ではないが独特な雰囲気て美しさを競うオミナエシの名の由来につき2つの説を話した。ナンテンハギでは2枚の葉の付け根にある1本の刺をルーペで確認し、葉の名残であることを説明した。



ヤナギランが群生して咲いていたが、この風景は特に参加者の心に残ったようだ。下見では蕾だったバアソブが釣り鐘型の花冠をぶら下げていた。類似種のジイソブ(標準和名ツルニンジン)との違いを説明しつつ駐車場へと歩みを進めた。沢山の花に出会え、素敵な一日を過ごせたのではないだろうか。(杉山 記)

<4 班> (担当: 佐野、矢下)



当班は7名で、いずれも八島湿原には何回も訪れている方々だった。シカ侵入防止用のネットをくぐり観察を開始すると、早速、ノリウツギ、ダケカンバ等の樹木やノハナショウブ、ウツボグサなどの草花が出迎えてくれた。木道に入ったので、八島湿原の成り立ちや高層湿原の「高層」の意味を知ってもらった。また、湿原中央のドームの成立過程と、やがて泥炭の堆積と共に乾燥し森林へ遷移していく運命にあることを解説した。観察を続けると八島ヶ池の縁にヤマドリゼンマイが群生している場所があったので、ヤマドリゼンマイは栄養条件が良くなった湿原に生えることを説明し、湿原の遷移が着実に進んでいることを知ってもらった。

木道脇のススキの穂に、茶色になったバツタがしがみ付いているのを見つけた。皆さん、興味深そうに観ていたので、カビの仲間のボーベリア菌に感染したバツタの遺骸であることを説明すると、気味悪そうにその場から離れていった。木道沿いにはニッコウキスゲ、ハクサンフウロ、イブキトラノオ、ワレモコウ、オオバギボウシ、ミズチドリ等、色々な草花が見頃を迎えていた。また、昆虫も多く、赤トンボが飛び、ヒョウモンチョウも舞っていた。そこで、赤トンボについて解説した。発音の仕方で「赤トンボ」が「垢トンボ」になるので、イントネーションに気をつけることや種の識別には羽と胸の模様を観ることで判別できることを解説した。

シシウドの葉にキアゲハの幼虫がいたので観察してもらったが、家庭菜園のニンジンの葉でよく見るイモムシなので珍しくないようであった。そこでシシウドがセリ科であることを知ってもらった。木道に近い所で、ヤナギラン、クガイソウ、ハナチダケサシ、カラマツソウ、ハクサンフウロ、アサマフウロ、イブキトラノオなどをじっくりと観察していると時間が経つのが早く、既に12時を過ぎていた。観察を続けていると、すぐ近くでノビタキのさえずりが聴こえてき

た。肉眼でも見える距離にいたので、特徴である胸の赤橙色斑を観察してもらった。少し歩くと、今度はホオアカのさえずりが聴こえたので、赤い頬を確認してもらった。昼食予定地に着いたのは、12時半を過ぎており、既に数班が昼食をとっていた。

昼食後はペースを上げて観察することにした。マルバダケフキ、ナンテンハギ、キバナヤマオダマキ、ヤマホタルブクロ、コウリンカなどの草花や、ミズナラ、カラマツ、シラカバなどの樹木について解説しながら観察してもらった。ゴールに近づくと植物の近くに樹名板が設置してあったので、ここで観てきた草花を再確認してもらい終了とした。ゴール地点の駐車場には、ほぼ予定通りの14時30頃に到着することができた。今回は、天候にも恵まれ、資料に掲載されている草花をはじめ昆虫や野鳥も観ることができたので、十分満足いただけたと思う。（佐野 記）

<5 班> (担当：小嶋)

メンバーの中に4年前の参加者がおり前回と比べて花の数の多さに感激していた。前回熱中症で途中リタイヤした人の仲間だったせい、「今回は素晴らしい、前はただ暑いだけだった…」との意見も聞かれた。確かに、1週間前の下見では蕾だったものが今回は開花していたものも多かった。(クガイソウ、オミナエシ、カワラマツバ、ウド、コバギボウシ等)



皆さん朝が早かったせいで、出発時点でもう「お腹が空いたよー」の声が出た。そこで、木道の両側の花を眺めながら昼食場所へ歩を進めた。

左側の森林との境界から右側の湿原に向かっては、木道を挟んでいろいろな花が咲いており絶景だった。湿原の縁ではモウセンゴケ、その少し上からアカバナシモツケソウ、ヨツバヒヨドリ、ヤナギラン、ハナチダケサシ、カラマツソウが観られ、木道近くではハクサンフウロ、アサマフウロ、イブキトラノオ、ノハナショウブ、クガイソウ、コバギボウシが迎えてくれた。一方、左手を見上げると所々にニッコウキスゲ、ノアザミ、ノハナショウブ、イブキトラノオ、シシウド等が見られ、更にその上をノリウツギの花が縁取っていた。こうした豪華な花の饗宴を、一同たっぷり堪能した。それでも昼食地には一番に着いて、早速昼食とした。

昼食後は管理道の右左の花や木を眺めながら歩いた。キバナノヤマオダマキを探したがなかなか見つからなかった。しかしコオニユリに誘われて近くまで行ってみると、そこに隠れるようにオダマキが咲いていた。みんなで「見つかった、良かった!」と盛り上がった。この道沿いではオミナエシ、ナンテンハギ、クサフジ、ホソバノキリンソウ、キンミズヒキに会えた。また鹿よけのフェンスをくぐると植生がガラッと変わり、シカの食害から守るためのフェンスの重要さが実感できた。資料にある花のほとんどに会え、またウラギンヒョウモン、ミドリヒョウモンなども見つけられ、参加会員には大満足な観察会であったと思う。（小嶋 記）

【以下、スナップ写真など】



バス席にはアクリル板の仕切りがなくなった



湿原の向こうは車山～蝶々深山へなだらかな丘



池塘とコバイケイソウ



色とりどりの花が咲き乱れる



ニッコウキスゲ



アカバナシモツケソウ



チダケサシ



キンバイソウ



ノハナショウブ



ハナチダケサシ



ハクサンフウロ



アサマフウロ



ウツボグサ



ノコギリソウ



オオダイコンソウ



ミズチドリ



キバナノヤマシャク



コオニユリ



カラマツソウ



ノアザミとウラギンヒヨウモン



コウリンカとベニシジミ



灌木の上にノビタキ(♂)がいた



アザミの上にはホオアカ(♂)がいた

以上 (報告まとめ: 小久保)